繪本田村物語

六

へ13
3300
6止

へ13
3300
6

復讐奇説田村物語　巻之五　下巻

武關　川上　甕老　人編輯
下流　梅梢軒關旭　訂正

大正十八年九月寄贈
本大學出版部

第十回　忠孝の餘慶

去程に田村麿そこ〳〵に勇ませまし。荒しく出立。旌旗空に覆ひ人強く。馬盛ん。既に赴く時節に至りて。清水の觀世音の佛前に詣で。ゆく〳〵も心の通じ。開運に祷て。鈴鹿にさしてうちいでぬ。やがて名に聞こえし逢坂の山に越えゝば浦波の栗津の森やかげろふの。石山寺に代拜し。是も清水の一仏と頼ふあゝふ近江路や。瀬田の長橋踏なびし。駒も足なみや勇しん。そでに伊勢路の山近くなれ行ふ。ちらゝ雪の降るゆゑ。寒さ

さん打忘れ。時ちふね花の面白やと。猛きこゝろ和らぎ。土も木も我大王の神國ふ。元より観音の御誓ひ。佛力といひ。神力もなを尽く敷くに健男がまろよ久しく親の離。今ぞ親ん付ありと。惣軍鋭氣盛んにして。終ふ鈴鹿山の麓なれ。鈴鹿川あぞ暑ふ。見渡せば川の流屈曲して。巖峨たり。山又山。皆白妙ふ雪ふ臥せり。月も寒く水又冷。碧潭のそこ物凄じくして。崩岸の小笹も雪ふ臥さくなせり。さい白ふ積る千歳の古松を山を繞く蟠龍の形を擬し。銀を束し百尺の奇石を。谿ふ横ふ猛虎れ嘯ふ似たり。花泉の郷音ハ山根ふ砕て。鵝毛ハ花ぞ捎を拂ふ野雀樹の洞ふ隠れ。猿声遠近ふ啼く。其ありさま寂寥として神代の往昔ハいざ知ふ。空飛るれ通路なりふ。歩ふ

たゝぶ道もなく。御方の兵ハ勇めども。此方の岸ふうち郡く。悶々然れ。だかり。斯く韋駄天を遥ふ石龕の裡より足を入て嘲笑つくしいく。官軍ハ幾くび打向ふ。いそぐ我ハ勝ふ。得べき。五ハいま微しく戯れく。寄手の謄を挫ぎ。鬼首眼義鏃軍太。只二人を従へく。峡なれ逕ふ回て簑笠ハ吹雪と侵して。暗ふ谿川の渉瀬を渉ること。この山の凹よかくろひて。百日の鳥銃と小脇ふ引付。移とゝろく待くく。彼方ハ斯も雪の道踏ふけて先ぞふ進し正市ハ。いかも此谿川を一番ふ渉さんのことと心勇ミ。浅瀬やあると尋れとゝ渉ふ。不思儀や帯くれ千鳥の小柄。さぶも清らふ三声ふ發ば。こハ不審と仏驚れ。借おりくバ過しくろ。世代作方ゆて刑部太郎ハ物がくろふ。

関正市
魁を
拝ぐ
田村川の
浅瀬を

危きに臨んで声を發さず。小鳥の小柄を不思議あるものなり。若くは彼が乙女を殺し。立退く折ふ落せしの欲何ぞもせよ。仏得がられて有さまと。吃と振向。ひらりとふ孔雀鳥銃の。響を山に動しけり。正市が胸先を斜に拂つく玉は迫を過くるがごとく。忽胸のつくりは血に染まり。軍終りて後ふ思へれば日頃信ぜし観世音の隠篠。半破くれは正しく大悲の擁護なりけるかや。さる程ふ正市は浅手の疵をこらへもせず。すはこそ奴ぞ。鳥銃の煙りと幕のて追て行。韋駄天を件の玉を打損じ。鬼首鑓を左右ふ備へ山の頭ふ顯はし出。剱ふ代音〻大音あげて。汝ぞ〻び〻や。韋駄天刑部が爰ふあり。優しくも田村が討手に向ひ給へよ。田村が父の苅田磨も。我照門ふ計を授け。あくなく泉下の鬼となるぬ。

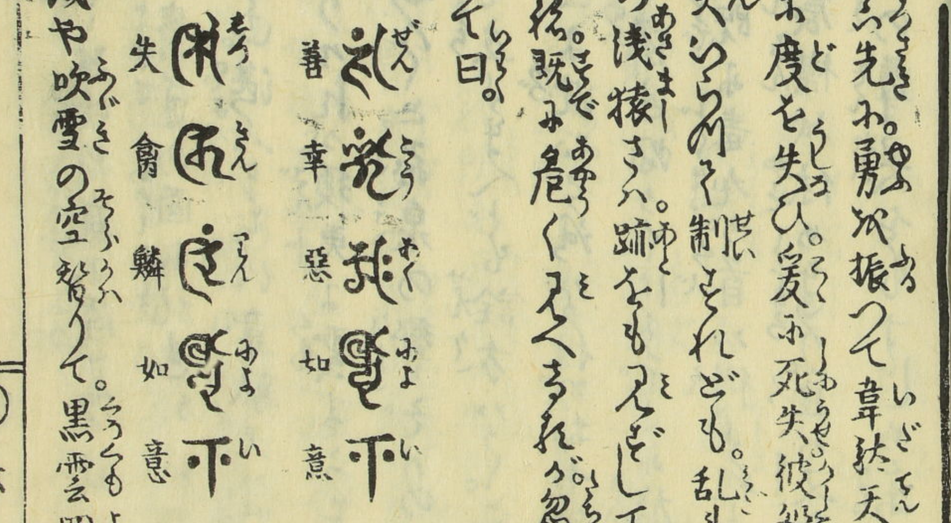
今照門も。隠形鬼毒丸と名乗。身純高貫ふも。霹靂段平天魔八藏と名を改め。我とひとしく此山ふ住われば。敵とおりて田村を出せ。汝を名もなき下郎なり。此場を逃去て可惜命を助るべしと。傍若無人の大言ふ。正市能くこそあれば。間違なく刑部なれば。汝ぞ〻く過言を止我言ところを紙笑よ。往る比筆捨山の山中まく。我妹乙女をあくまで殺せしふ。外人ふあらぬ証據を千鳥の此小柄。危きふ臨んで音を出せしふ。いかふ人の あれべしと。無念の眼ふ詰ようとすれば韋駄天嘲て微笑く。扨を その時我手ふかけしを女こそ。汝が妹ゆくあり。ほうの欲。尤ぞよ妹 が墓ふ入るべ。汝もともぐ地獄の住居さとべしと蓑笠とも ふ捨ぬ。こはおそろしの黒髪ぞ紅のおどろの髪を振

乱し腰あハ虎豹の皮にて纏ひ。眼の光り人を射る。弓くゝも馬を
も一枝の。鬼とも人とも分ぎる。二人と従へ左向のを田村麿こゝの
洞谷にて。やゝ暫ひて。扨こそ隠形鬼毒丸とゝ云れい。弓木甲斐る
照門なるぞ。嘗の敵の韋駄天毒丸彼ホ二人と討取ぞ自餘の
奴等とゝ云ふ足ざれ鬼畜なり如何ふ義人ハ非ざれや。正市討
ぞなる續けや面こと。揉幣取ゝ一度拝けぞ。石井義人と始とし
て。大勢一度ふどゝとおめひて。餘ぞる洩ぞる討られと。追ぞ落
を。韋駄天怒つゝくんとと睨。持ゝ筒をかなぐり捨。大太刀抜
ゝ拝ゝ討。當ぞを幸ひ羅拂へ。強力勇氣のゝれ肉よ。し
めゝ寄し寄手の勢も。右と左へ切立られ。ぐらゝくゝと崩れ
ところ。是ふ氣を弱ゝ鬼首眼義鍬軍太。走りかゝて正市。

引手と馬手に組けゝところ。公得ゝと刀を撚つゝ。三尺
一寸氷の双電光稲妻閃ゝとゝへしぶ鍬ぶ首を失てんぎと。
是ふ驚て鬼首眼義迯生と後のおぶ鬼の髪ゝ。むんぞと攫
で中ふ挈げ。力ふ仰せゝ云ひやと投ぶ。顚倒らせて向ひ
の谿川ぶんぶと水ふうちふ込。形をゝへぞなるふ。こゝとゝ
怒る韋駄天ぶ。四角八方うち拂ふふ巖の上より毒丸を御方
を討せそ出合と。ぶい先ゝけて。ぶ出ぶ。續く悪鬼ハ霹靂跡平
天魔ハ義鉄棍一。その外魔軍ハ勇をゝし。得物ゝを挈つ。包し
頭ハ一ゝふ。火焔とゝ。赤頭の。向ふ吹雪ふ吹ゝ。烈火を
かゝやと押ゝて。追つ返ゝつ入乱ぶ。こゝゝ先途と戰ゝ。この村
田村麿を味方ゝ励ゝ。人甲斐なゝ者ども。韋駄天毒丸

が空代羅行の術ありとも。王位より賞く天罰といひ。父の讐。今こそ
あり人知るべしと。手早く鏑矢抜出し。きりきりと引絞つて。兵ど
放つ矢誤づとはさふ向くれば毒丸が眺し左の眼より。襟首ぐさと
羽根ばくら責くぬ貫けど。何ぞ以くなるべき。虚空とはうむ若こ
い。今ぞ叫喚阿鼻焦熱。流るる血は瀧津瀬の。岩根ふ撞
と倒れ。処代義人はかりと羅かり。押へて首代討落し。大音
あげて。隠形鬼毒丸。實と弓木甲斐守照明と。今日只今坂上
田村麿一箭ふ討取るぞと。高らかなりと。笑も勇めれ御方は兵士
ちまち鎗ふ件の首代突貫たり。此方に拒へしあり。猛い仏地
よくこそ見へよられ。是といつるも御祢特のとて老狐の怨この今
ぞふ。回ぬとや知るべし。是ふ氣を得て官軍を。鯨波と

造つて押寄せ。正市義人生い先ふ。勇代振つて韋駄天と。逃し
いせじと取詰るふ。魔軍ハ前後ふ度を失ひ。爰ふ死失彼処ふ倒れ。
ぞと崩れ立つ。韋駄天ハ制されども。乱れ立つ
れ烏合の兵。鬼畜のこ族の浅猿さハ。跡をもえ忘して逃ゆく
ふそ。ちしりの韋駄天こそ人の孫。既ふ危くこそ見へられ。忽ち巌
ふ飛登り。天ふ向ひて呪咀して曰。



魔魅 昇天 空 善幸 惡如 意
逆流 黒雲 亡 失禽 鱗如 意

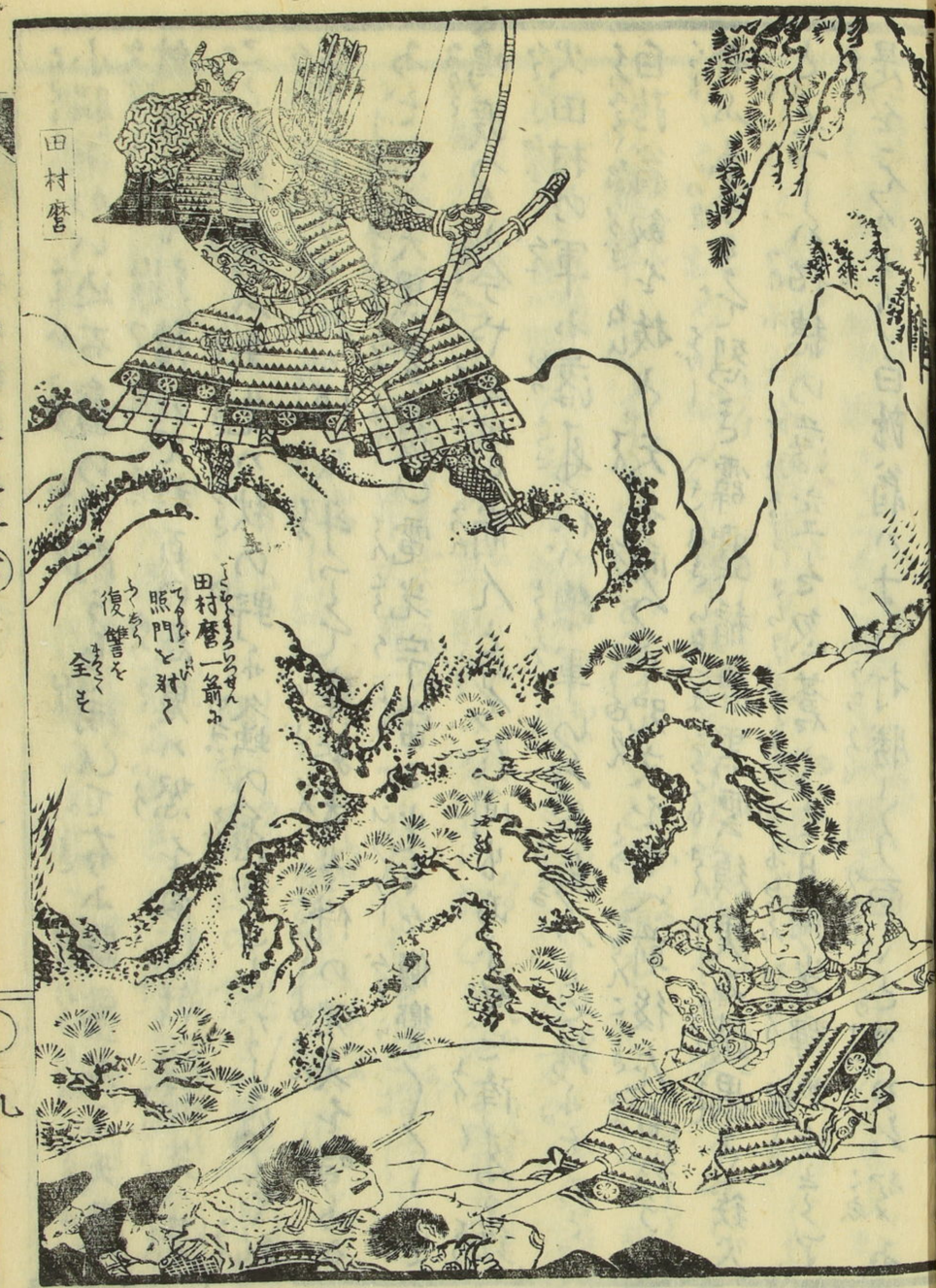
と唱へる声も物冷じく。不思議や吹雪の空響して。黒雲四方さ打

權ニ霹靂稲妻閃めいくり。梢く風吹折嵐ふ。降る鉄火の焔の勢ひ。焦熱地獄も斯ゆらんと寄手の面ふ乱まかれば。こ流い猛ふ。そ炎しかも鉄火の責ふ堪うふ。湛うらに韋駄天ハ。跡くらまして。鶏川を越く石龕ニ取りかれが。須更ニ雲そうち晴く。雪さへ止ぬ千丈の巖も松もちんくと。泉の響ぞりのそゞ。斯て田村麿を蚩嗤ふ立くも詮方なく。これこの陣屋ニ戻り給ふ。旦日を西ニ沈むこ為なれば。おわおそ鬼の三ッ四ッ二ッ。空高く飛渡るも憐ニ思ふくちゝでゝふ旅の夕べれ御心鬱こと楽みこと。既ふ毒丸が首ハ得られども。いろう鬼神をうち亡して。天皇の宸襟ふ休めまつり。且ハ又韋駄天が頭ふ得て。毒丸が首一同ふ考の尊美をもすじめふ。せん

くふおりひまくども。妖術ふ以て。矛を道ふ。足を破らん討。暑ふそ。面くいくふと同まふ。その時正市進ニ出。今日れ戦ひふあわ韋駄天ふ討取ニ。こうし妖術のふふ晦されぬれこそ。返もぐくも口惜けれ。鬼ふ角角ひの鶏川をうち渡りて。足非ニ鬼ふ城を踏破て。勝負ふ一時ニ変ぐ。拳を握て歯噛をゝしてぞ拉くられ。かれ所ふ義人ハ忙しく御前ふ出くて。只今外面ふ仙骨童眼の翁出まり。自生く云々れい。此山の魁首韋駄天が妖術ふ破らんとの御事なれば。我ふ一ッの法あり。四海万民の為なれば。一臂の力ふ添なんと。こそやこふら。如何ふ呼入ニて対面ゝなまひ。ひの謂を尋ふ生くと進ひふ。田村麿よろこびまひ。鬼ふ角こうこへむく

まれ對面をして尋ねべしと。俘の中に正市ハ。思ふ様ハ横ぎて
と行く。これぞ正しく某が師の白鶴翁なるべし。いざ〳〵某ハ入て参
らんと。御前に参る。外面ハ生ばえ白鶴翁そうち笑ふ。あゝ跡
の對面よ。別れて後も恙なきや。御辺の安否いかゞと都
の便を笑ひぐさに。ふる所に痛ありけるゆへ。明君ハ仕へまひて今ハ
昔の御辺にあらずと。いと敬讓の翁が言ハ正市ハ父母ハ達に
ごとくにて。歓喜の涙みくまれぐ。先く我君の待ゝまうんわ。
ちかきへ参りまうとて。田村麿の御前ハ出件の子細と述る
に田村麿ハ座に立まひて翁に正座ゝすめまうべ。翁ハ驚て
某ハこの阿ハ住居なそ。あれハかひなし山家の翁君の御
前ハ出まうさん。なれあるべきなれと。若韋駄天の妖術を破ん

とて御幸なるべ。是なん四海の人れ為なれど。明日君ハ供奉み
まゝ。彼が妖術に行ハ付ハ某忽ちうち彼ぶんハ其付御方を
進めまゝ。君が武勇ハ誰ハ敵ましたりのあらんと。いとも静ハ
解給る。智術の奥もいと斗ゝと。おりひかれて教母〳〵斯く
その夜を軍勢の鋭氣に養ひ。明日ハ面く勇みいさみ白
鶴翁ハ君の後ハ附まゝ。煙嵐の巻く押寄まゝ渡
を向ひの谿川の浅瀬を昨日見置まゝれば関正市ハ先
ハ川を渉まゝ鬼が城ゝ寄ゝとひしく。大木大石に拗かく
まゝば。塵土を巻く空ハ立響ハいかゝ乾坤も爰ハ折んか有
さまなり。去ゝとハ鬼が城ハ韋駄天が。あゝ物しや某が昨日
のまを並ハ凝ぶれかいで夫まゝば鑿ひき裂まゝと鉄格を。


田村麿
田村麿一箭ゐ
照門と射
復讐を
全せ

る門
矛人

小服ふかい込石龕の大門うち開ひて。右ふ霹靂左ふ天魔。鐵槌ニも引續て數百の悪鬼ハ怒を為し。戟の穂先ハ茅ごとく。射違ふ矢先ハ秋の野ふ久蛍の乱ごとなり。ばらばらと乱軍とかうり合れが頂ハ斗つて。漳於天を。伴の呪文を唱ふるふぞ忽一天黒雲霞ひ。電光宇宙ふ光々々。響く〳〵。雷鳴渡つ。今や天地も崩んとつ。花間もあらせぬ降来る鉄火田村の軍ふ落来れば。總軍いろ〳〵失ふとう流ふ。その白落翁剣を抜く。天ふ向つく。呪文を唱へ前後左右ふうち拂ふふ。今ハ。ぞ怒き霹靂稲妻黒雲須臾ふ消果て。鉄火とえ〳〵ハ枯穂の落穴ふ忽蒼〳〵と日輪光燿烱々さ。是をこるより白落翁ハ。すハ打勝〳〵面〳〵と。承り。ゑ〳〵ふ

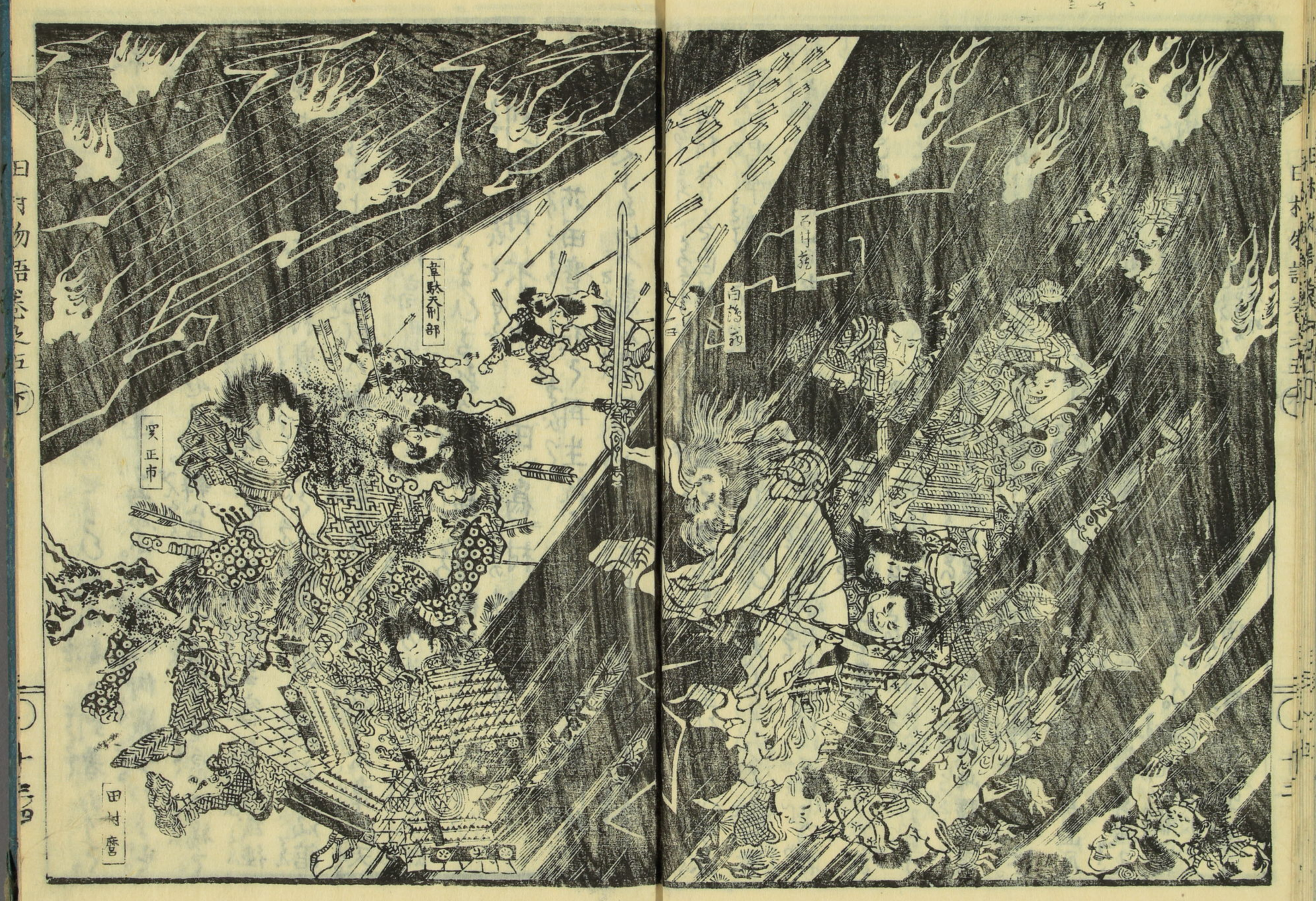
田村驚。揉幣取〳〵うち振〳〵此圖を外さるりのどもよ。かれかれと。憐下知ふ。官軍なりかハ猶豫ふべ。詞ども切ども獣ごとそ。おりて叫んぐ蟇直ふ。ふり伏せ薙伏せ突入るふぞさしりの魔軍もなまりかふ。どふ〳〵と石龕をはしてうを所ふ。章駄天焦燥く。ふ振り。鬼とも云ふ。味方の兵が未練の働ふ憑やせそ。この章駄天が死りの狂ひ。天地を劈力ふ看と。鉄棒ふ。ふに水車大場一声つ〳〵ちつと投げ〳〵ど。押ふ打ふく七八人同じふ〳〵ふうち伏らる。狂豫ふ。ひのごふ傷の松の樹。〳〵と引拔く。獅子奮迅の怒をる。四方八方薙〳〵れ。眼ハ鏡ふ血ふ濺ぐ。荒ふ。あるる勢ふ。勝誇〳〵る官軍も。盛〳〵されて〳〵〳〵人間業ふハよも非じと。白ふ波つて見へ

まれとこそ思ふ。不思儀や御方の旗の上ふ。千手観音の光りに放つく虚空ふ花行ふの御手毎ふ。大悲の弓ゆを智恵の矢に充めて。一度に射せバ千の矢先雨霰と降くく。魔軍のうへ乱れ落ちべ。大悲の弓れ外矢なし。魔軍ハ残らず討ち取れが。韋駄天数う所ふ矢に帯なく。猶も豪氣を百倍して血ふ塗られ大手に成ひろげ。田村を目ゲ花かくべ大悲の光ふ眼も晦こ。狂ひ回れを正市ハ得くりと生ち向拝討ち肝腕ぼそと切落せど。透もあらせず田村磨つけ入れ髪に韋駄天が左手に抓んでもぐに。迷途の旅よりく行んと捻ふとこそ成に田村磨ふ練の手に肉ぐくとぞん。乳の下ゲく切さげうさしの韋駄天くり得ぞ。叫とぞかくふ仰さまふ倒くく所に

乗かくく怨の刃おりひ知まと。とぐめの刀咽ゆへに。貫れくふぞ公地ふれ。関正市ハ勇ふいさみ。君の恵ふ今ぞいま卒堅遂うれくちよと。韋駄天ゲ首打落し。おゲ髪に かひ抓んゲく。目よりも高く指あゲれハ。惣軍一度ふ寄りて。凱哥の声山谷を動しけれぞ勇しきれ。是ぞ大慈大悲の観音擁護の佛力なりと。田村磨ハ伏拝く。懽悦の眉に開うれくに正市も同じこそ成の花ぞ降。大悲の徳をぞ仰ぎ奉れ。誠なるかな天網疎かれども絶ふ漏さぞ。岩岸刑部太郎弓木田斐守。その外大伴貞純。大伴高貫を始として。魔軍一人も残さず亡びくぞ。扨世音に佛力といひ。田村磨の武徳の至るとこそふ古往今来牧三峯の童子も知るとこそなり。去ぐに

田村麿を軍に引纏て都にさドこて登りなりつゝ白鶴翁いこ是
うり暇を告く山荘ゑ帰ふんとせ〳〵に田村麿宣く然りく老翁
をも倶ゑ都ゑ伴ひて。且暮教誨を示〳〵まくとあるゑ。鶴翁堅く
固辞で。某ハ山家の翁人間ゑ望なく山荘の風月ゑ老を養ひい
こと。元より願ふところなれど。麿軍の妖術廣大ゆうと共ゑ是に
彼らぞんハ四海の民安穏ならじと左おゞく又我ゑ忍びざ。爰ゑ
来りて妖術に対ふ。幸君の武徳ゑ鬼神に亡ぼし
たまふ人ハ。何ぞ世ゑ望ゆゝんと。種々に賜に送りまくともその御
志に謝しまつりて更ゑ一ツもこれを受ざ。又正市に向つく御辺よく
忠に盡し。日頃学び奉し事ども疎ゑしまふなゝいひ捨。袖と攀
て飄〳〵然として去ゑ去れ。正市もくゝろゑ深く感くとして袂に

別れ。田村麿を巨勢翁の後薩えのれまで打望ひこまふ嘆息
ゑ耐ず。嗚呼誠ゑ是隠君子なりと宜ひく。夫より〳〵橋に
打渡り。土山の宿中に此夜を人馬を休め小七といふれ酒店の名
酒簡ゑ鉄格二ゑ國房を佩汲ぶ。将卒ともに悦びを盡したまふゑこの
酒まことに味ひ美なりと宜ひし。後に人田村川と命。今ゑ五十
て此所の名酒とんなりつゝ。又遥ゑ星霜〳〵て後此驛の東
ゑ将軍田村麿を神ゑ祭りて。田村明神と仰奉て。神社を造立
驛中東の方の生土神となし。崇敬なりつゝ。例祭を正月
十八日なり。神宝ゑハ田村将軍の画像あり。左右ゑ二鬼を従へ。又
鈴鹿御前の画像俱ゑ彩色ゑ〳〵甚表装美なり。
二鬼ハ韋駄天毒丸とかゝ〳〵なる物なり。鰒老人竊ゑ桜
鈴鹿御前ハ疑ふらくハ月雪姫なや画物ゑ是ハ叔ゑ田村麿ハ鶏鳴ゑ


白滝丸
石井蔵人
韋駄天刑部
冥正市
田村麿

と為。土山の驛を立て道を急がせらる。既に都に到著ありて。
事の次第を審に奏聞に達しぬ。天皇の御感少からず。
速に妖鬼を平げし悦ばせの辭官をなりて多く金帛を賜ふ。
恩賞浴びぐれば。是公卿雲客もその武徳
を賞せられしとぞ。田村麿を讃んで君恩を謝し奉られ函館
ありて。上下の悦び挙て云ふも非ず。扨しも韋駄天
毒丸を始め。負紙高貫等の首を切て孝の尊靈を祭り。既
に素懐を遂げまひしが。今ぞ知る。白鶴翁が

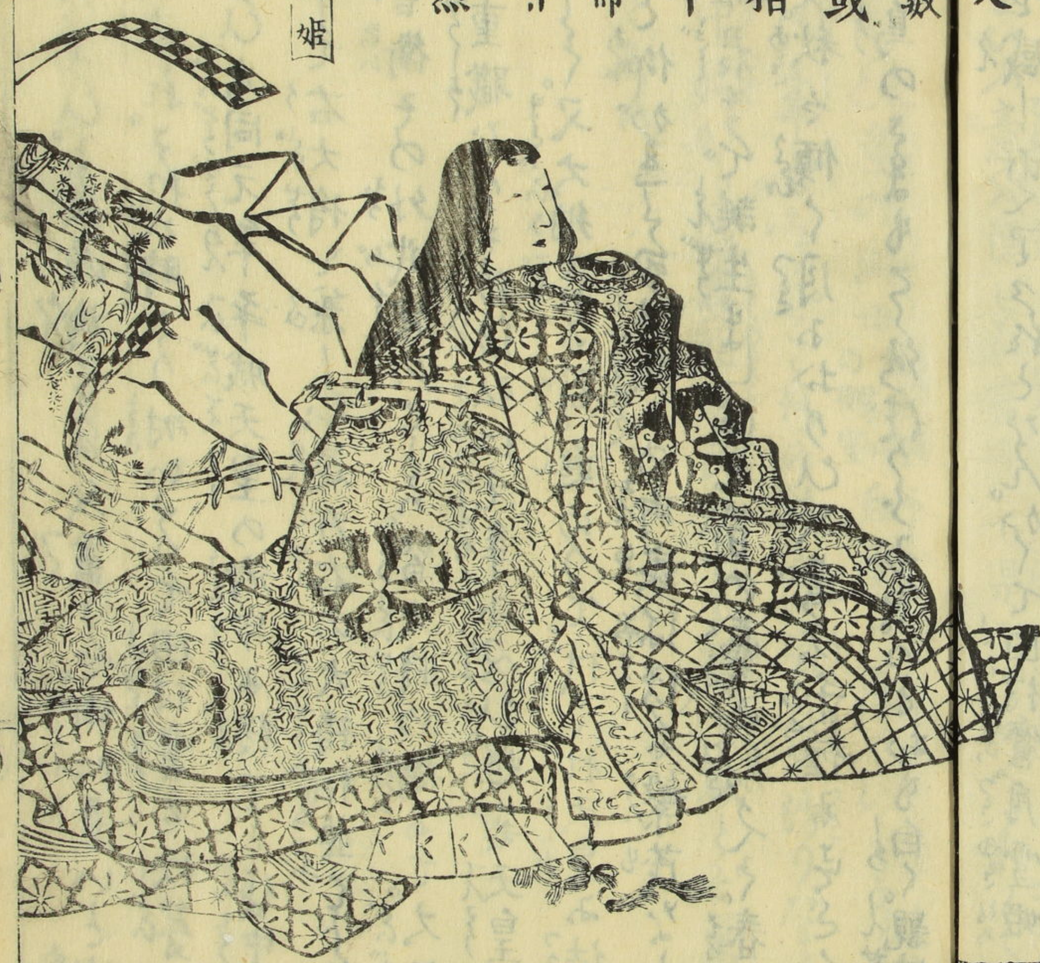
刈レ田再不レ生　田鳥村繁榮

といへりしに。苅田麿に死て再生れしことなく。田村麿に家門絶ず
繁栄とぞいふ意を隠せて言はして是を付くれ人をそ

その明なれを感じ給へるとなん。かくて田村麿月雪姫を
いとく千手觀世音を渇仰なしたまひ。是より。関東市が進めし
とゝなりて。彼が命じて大伽藍を建立なしたまひ。まうと
佐く木民部をとゝじめ。石井藏人関西市等のごとき忠ある人に
あハ其功を算て。高禄をたまひ。或ハ金帛を賞ありて後。正市
が父正右衛門正久をすゝめ都に召登せらる。且世代他が娘
小菊をその生れ美しを而已なるべ。こゝを正しとゝ。彼家元
より武士の筋目といひ。正右衛門が所縁あれば。ひとゝ月聟べき
ふ。あるべきて正市が妻とゝ。世代作も彼が信義を重じよく
人をあはれむのこゝを深まれば。武士の筋目として。空しく民間
に埋れんへ。更ふなげくとして事なりとく直に是を挙用ひて

大之命乎人
也以吉凶禍
福貴賤壽夭

人所稟之數
厚薄不齊或
相倍蓰或相
什佰或相千
萬天之降命
爾殊者非有
意爲之俾然
而已矣



武士となりたまひ。よろづの御こゝろざし盡させ。御仁慈いと淺
からぬを聞へさせ。されば時さうの付いうして田村麿を次第ゑ
昇進のしまひ。大同元年平城天皇の御宇ゑ移つゝ後中納
言田村麿卿して右大將を兼しむ。是左右の大將相並べ是
なり。禁中警衛その外武官のこゝろ。皆大將の掌ゑて大臣
ゑ相對ゑ重職なり。その後弘仁元年ゑ及び。嵯峨天皇の
御宇に當つゝ。又大納言ゑ昇進ありて。代〻代天皇ゑ仕へ
天朝の忠臣と仰がるゝゑ。坂上の御家繁茂なし。
月雪姫を稚君ゑて誕生ましゝ。昔の憂ゑ引くゝ。春ハ
曙の櫻ゑ愛。秋を傾く月ゑおのおのひを遣り。千種ゑ咲くゝ
虫の音。空飛鳥のさまもゝ紙ばゝゑ。いとおもしろく。親戚
常に會合ゝまひ。産の御母（種徒御の側室）白菊ゑ厚くいとゝろ。萬
樂ゝかゝさる事もなゝ。こゝ紙のはゝに歳月ゑ流りなまひ。
夫婦の情中ゑかゝぶ。君明ゑ民ゑとゝ萬ゝ歳とゝ榮ゝ
ゑまひとなん。

田村物語巻之五 下巻 畢

編述

出係

蹄齋小馬

傭書　石原駒知道

剞劂　朝倉卯八
　　朝倉權八

孝子嫩物語

全部五卷

去辰五月賣出し置申候
姉孝千辛万苦〳〵報讐を
全ふ志〳〵れ面白くさ〳〵しなる
ほど求ほ後了ぬべし

小說繪本目錄

唐太宗軍談	全二十冊	同	二編	全六冊	繪本新說二熊傳	全七冊	北條泰時 明斷錄 全六冊
宋史軍談	全二十冊	同	三編	全六冊	同田村物語	全六冊	繪本顯勇錄 全十冊
前太平記	全二十冊	同	四篇近刻	全六冊	同報仇雨夜傘	全十冊	
同圖繪	全六冊	同	西遊全傳	全十冊	同亀山話	全十冊	
前々太平記	全二十冊	同	二篇	全十冊	同合邦辻	全十冊	
繪本扶桑皇統記	全六冊	同	三篇	全十冊	同孝感傳	全十冊	
同後篇	全七冊	同	四篇	全十冊	同鎌倉年代圖繪	全十冊	
吳越軍談	全十八冊	同	稻妻表紙	全八冊	同金刀比羅神靈記	全十冊	
繪本吳越軍談	全十冊	同	二編	全十五冊	同彦山權現靈驗記	全十冊	
同貳篇	全十冊	同	浪花俠夫傳	全八冊	同伊賀越孝勇傳	全七冊	
同三篇	全十冊	同	報仇安達原	全六冊	同忠孝美善錄	全十冊	
同四季物語	全	同	朝顏日記	全十冊	盆石皿山奇談	全八冊	
同妹背山	全六冊	同	年代記	全			
書砧藤綱模稜案	全十冊	同	雪鏡談	全十二冊	金刀比羅名所圖繪	全六冊	

各邦書籍發兌

浪華

心齋橋筋北久寶寺町通角

三木佐助梓

蒿齋主人編輯

繪本新說二熊傳

自初篇至三篇　十九冊

該書ハ文祿元年の頃朝鮮征伐の時其勇將の隨一なる加藤清正の嗣子忠廣に勤仕て寵を得し大鷲熊右衛門と云ふ者真蔭流の武道ハ達し大胆不敵の若漢なり常ハ酒興ハ乘じて傍若無人の働き多き故其一國擧て大鷲を惡まざる者あきふとして或人其頃武伎ハ達しなる飯塚善之進と云ふ者を忠廣ハ薦めて大鷲と較量あさしむ然るハ大鷲員を取り遂ハ其遺恨を以て善之進を暗殺す故ハ善之進の嫡子且荒川熊蔵と云ふ者等と相謀り讐の大鷲を探索もとるハつゝ種々艱難不慮の災ハ逢ふとも數回と雖も神の冥助を得て免れし事抔を著せり而して此奇文婦女子と雖も一たび閲せば一條より面白く說解るもの次々見まく思ひ玉ふるり尚求めて鄙言の虛あらざるハ知りなん